

# 「教師が変わる、子どもが変わる、学校・地域が変わる」

～日本一人を大切に作る学校の挑戦！～

兵庫県淡路市立志筑小学校

校長 山本 哲也

## 2. 「教師が変わる、子どもが変わる、学校地域が変わる」—その1— (平成28年・29年度の取組)

全職員と取り組んだことは、大きく次の5点。

- ① 児童と職員が共に目指す目標を持つ
- ② 児童を信じ、期待をかける  
意図的なボイスシャワーの取組
- ③ リーダーを育て、集団を創る
- ④ 「聞く」の一点突破
- ⑤ チャイム着席の取組

### 1 はじめに

平成30年1月26日、卒業アルバム用の職員写真を全職員で撮影し終えたとき、自然と拍手が鳴り出した。不思議に思い職員に尋ねると、「ここ数年児童を教室に残したままにして職員写真がとれませんでした。やっとここまで来たんだなあと思うとうれしくなっ  
て・・・。」という答えが返ってきた。

振り返ってみると、平成28年度に私が校長として赴任したばかりの本校は、始業のチャイムが鳴っても砂場に数人が遊んでおり、教師が針のむしろの上で必死に授業をしているような学校であった。また、終業式は体育館に全校生を集めると収拾がつかないので、教室に座らせて校内放送でおこなうなど、多くの課題をかかえて落ち着かない学校だった。

職員はとても真面目で、崩壊に近い本校で粘り強く耐え抜いていたが、一生懸命がんばっているのにどん底から抜け出せないでいた。私は、校長として、畔から眺めるのではなく、この職員と共に「泥田」の中で共に取組もうと強く思ったことを思い出す。

児童を見てみると、集団としての意識が薄く、自分のことしか考えない。どちらかといえば「群れ」であり、「どうせ俺らが悪いんやろ。」が口癖で、教師の言うことはどこか斜めに受け止めていた。

児童養護施設から通う子もおり、厳しい思いをして学校に来ている児童もいた。また、学級という集団の中に正義や思いやりが薄く、面白いことや楽なことに流されてしまう児童を、必死になって教師が食い止めているようであった。

落ち着かない子どもたちも、人間関係がぎくしゃくして心を傷つけたり傷つけられたりしている児童も、荒れの中で心を痛めながらなんとかしたいと思っている児童も、そんな一人ひとりを大切にしながら、誰もが安心して自己実現を図れる学校にしていきたいと、強く決意したものであった。

そんな、本校の今年度は、全学年2クラスに特別支援学級1つの計13学級。児童数は380名の淡路市では一番人数の多い学校である。

### (1) 児童と職員が共に目指す目標を持つ

～学校目標は「日本一人を大切に作る学校」～

平成28年度、朝会の様子にも少し向上が見られるようになった5月、児童朝会で、学校目標を子どもたちに投げかけた。学校目標は「人を大切に作る学校」にしたい。この「人を大切に作る」の人とは、「みんな」のことであり、「自分」のことである。みんなの力で、「どの子どもも安心して自己実現を図れる学校を目ざそう。」「淡路島で一番の、人を大切に作る学校にしよう。」と・・・。

すると、子どもたちから、日本一、いや世界一にしたいという発言があり、最終的に、「日本一人を大切に作る学校」を創るという、全児童と教師集団の共通の目標ができた。

### (2) 児童を信じ、期待をかける

このころ、チャイムが鳴っても教室に入らない児童が数名いた。この子どもたちは何を訴えようとしているのか。本人たちも分からなかったのかも



しれないが、教室に入ろうと誘いに行くと、高いフェンスに登り、まるで鬼ごっこのように、関わろうとする教師の心をえぐる言動をあびせる。

しかし、「この子どもたちに期待をかけよう、決して切り捨てるまい。日本一人を大切に作る学校なのだから・・・」と職員で共通理解のもとで取り組んだ。

まず、この子どもたちの力を借りて、学校目標の横断幕をつくることにした。子どもたちに提案すると始めはめんどくさそうにしていた子ども、熱心に色を塗

り、渡り廊下に貼り付けることができた。その時「ありがとう」と声をかけると、照れくさそうに笑っていた姿が忘れられない。

それからもしばらくは、以前と同じように砂場でたむろしていた彼らは、そのうち一人教室へ戻り、また一人と時間をかけて自分たちの居場所へ戻っていった。

最後まで教室に入りにくかった児童も、中学校で



は、クラスの仲間と学べていると聞く。

どの子も認めてもらいたい。成長したいと願っている。まず、教師が、一人ひとりの

子どもに期待をかけ、信じるからこそが、教育のスタートであると改めて痛感した。

### (3) リーダーを育て、集団を創る。

平成28年4月15日、学級開きの黄金の三日間は既に過ぎていたが、藁をもすがる思いで、赤穂市在住の矢根先生を講師にお呼びし、学級づくり・学習集団づくりの研修会を持った。まず、ご指導いただいたのは、学校の役割と集団作りのために良きリーダーを育てる必要があるということであった。

学校の役割は二つ

- ① 学力をつける
- ② 良き人間関係を結べる力をつける

<集団>

リーダーがいる  
人格で統率  
みんなのために

<群れ>

ボスがいる  
力で統率  
自分のために

○絵本「リンゴが食べたいねずみくん」を使ったクラスのバックボーンづくり。

- ・誰かと力を合わせれば必ず願いが叶う。「あきらめてはいけない。」
- ・自分の持っている力を人のために使ってこそ本物。「人のために人肌ぬぐ子になりなさい。」

この指導の後、各学級・全校朝会でも「リンゴが食べたいねずみくん」の絵本の話をして、「日本一人を大切に する学校」になるためには、「自分を高めること」と「人のために人肌ぬぐ子になること」とであると宣言し、二つの柱(バックボーン)を子ども達にも先生達にも共通にした。

この後、自分のことしか考えない行動には、「人

のために人肌ぬぐ子になる」だったでしょと指導を入れ、だれかお手伝いしてという、「僕がします。私がします。」と先を争って力を貸してくれるようになってきた。教師は、褒める側にまわって適切なボイスシャワーがかけられるよい回転ができた。

### (4) 「聞く」の一点突破

児童の実態を見たとき、自分の話や意見を聞いて欲しいという気持ちは強いが、人の話を聞くということがとても苦手な様子であった。全校朝会では、毎回研修担当教師が、「聞く」の話をし、聞くことが人を大切にすること、人を成長させることを根気強く説いた。また、各教室でも、「聞くの一点突破」と声をかけ続けた。チームで一点突破を目指すことは、着実に効果を生むことが、その後の全校朝会の子どもの姿に現れるようになってきた。

### (5) チャイム着席の取組から

平成29年度の1学期も終わりになり、生徒指導部で取組の反省をしていた時のことである。「最近チャイム着席がしっかりとできるようになってきた。」というある教師のふりかえりに、別の教師が、「なぜできるようになってきたのかの方が大事ではないか。」と鋭く切り返した。そこで、その場にいた全員で考え導き出した答えが、「必ず教師が先に教室で待っている。」「放送で、チャイムが鳴る少し前に知らせている。」の二つであった。

当然、次の日の職員打ち合わせでの報告では、チャイム着席がしっかりとできるようになってきたことの報告だけではなく、教師が必ず先に教室で待っていることへの価値づけと、放送委員会へのお礼が述べられた。できたことだけ評価するのではなく、そのわけを共有することが、本当は大切なのだということを改めて学んだ。

「本物はつづく。続ければ本物になる。」これからも理由を共有しながら続けていく。

## 3. 平成28年・29年度2年間の

「教師が変わる、子どもが変わる、学校地域が変わる」

### (1) 自信を持って指導する教師への変容

どの子にも期待をかけて認めながら、一人ひとりの良さをみつけてボイスシャワーをしようとする姿が見られる。また、全ての教師が、明確に同じ目標を持ち、学校の二つの役割と、「自分を高める」・「人のために人肌ぬぐ子になる」の二つの柱をしっかりと共有することができた。

このため、児童や保護者に対して、決してぶれることなく、自信を持って対応する姿が見られる。

## (2) 学習集団・学校集団を創る子どもたちの変容

これまででは、自分のことだけ考え、楽しかったり面白かったりすることが価値と考えていた児童が、6年生は全校生のリーダーを意識した行動に。下の学年は、6年生を尊敬したり手本にしたりするようになって

てきた。また、6年生が、一年生の学級に出向き、世話を焼く微笑ましい姿も

見られるようになった。



## (3) 学校が変わると地域とのつながりが強化、地域が応援団へと変容

保護者は、ほんの少し子どもたちの様子が変わると、良くなってきたと褒めてくれた。地域も、「子どもの未来応援プロジェクト」と題して、様々に学校に力を貸してくれるようになった。

そして地域も、子どもたちを応援しながら学校とのつながりを深め、地域自身も活性化していつている。



## 4. これからこそが、本当の挑戦

さて、2年を過ぎ、学校は落ち着きを見せ、荒れる前の学校の姿が戻ってきた。しかし、本当にここがゴールでよいのだろうか。今まで2年間の取組は勿論これからも大切に続けていく。しかし、この取組を続けた先に、本当に「目指す教師像・児童像・学校地域の姿」があるのだろうか。自問自答を繰り返すうち、私達の出した答えはノーであった。

子どもたち一人ひとりが見えない場所にしまい込んでいる宝物を探し当て、掘り起こし磨きをかけることが教育であるなら・・・これから大きく変わる社会を生き抜く子どもたち一人ひとりに、本当の力をつける教育を目指すのであるなら・・・。

深く学んだことを自分の成長や生き方・社会に生かす学力を目指すのであるなら・・・。

このように考えたとき、ここからこそが、「日本一人を大切にする学校の本当の挑戦」であるこ

とに気付かされたからである。

そして、3年目の挑戦として目指すべきは、新たな「教師が変わる＝授業を変える」、「子どもが変わる＝主体的・対話的に深く学ぶ子供になる」、「学校地域が変わる＝学校が地域と目標を共有して、地域と共に児童を育て、育てた児童が地域に発信したり、地域や社会に学びを生かそうとしたりする」である。

これらの“3つの変わる”を目指した、3年目の挑戦が平成30年度の取組として始まった。

## 5. 「教師が変わる、子どもが変わる、学校地域が変わる」—新たな挑戦—(平成30年度の取組)

### (1) 校内研修の取組

研修テーマ)

一人ひとりが主体的に探究する授業の創造  
～地域から学び、ふるさとに

心寄せ続ける子どもをめざして～

まず、取り組んだのは「主体的・対話的で深い学び」の授業づくり。これこそ授業を変え、子どもを変えることにつながると考えた。

そこで、全員でアプローチする教科を生活科・総合的な学習、人権学習に絞り込み、授業改善に取り組むこととした。

その際、これまで2年間取組続けた“聞くの一点突破”を生かし、さらに、学び合いをつなぐベースとなる“スピーチタイム”の取組を行った。

### ① 自分の考えや思いを語る子にする

～毎朝のスピーチタイムの実施～

基本は、

- ・3つの文章で話すことから。
- ・友だちのスピーチを聞く。

\*大切なのは、「笑顔とそだねー」

- ・自分たちで発表を回していく。

\*相互で指名をつなぐ。

\*座席は、コの字やグループ隊形

- ・周りの子ども達からお尋ねや感想を出しあう。

\*自分事として聞き、意見や感想を持つ

☆3年生のある

学級のスピーチ  
タイムから(例)

〈君のスピーチ〉



- ・きのう、習い事の帰りに目玉もようのちょうを見つけました。
- ・ぼくは、どの種類のちょうかわかりませんでした。



めて、「はい。」「そうですね。」などと返事をしながら聞く児童の姿がとても頼もしく大きな成長を感じた。

スピーチタイムの取組により、主体的・対話的で深い学びの授業を進めるベースは整ってきた。

## (2) その他の校内研修の取組

〈3年目の挑戦項目〉

- ① ルーブリックを活用し、めあてとふりかえりをしながら、自分事の学びを創る。
- ② iPadを活用し、主体的に調べたり、まとめたりして、発信できる子にする。
- ③ 授業の中の教師の役割は、整理し吟味をかけて子どもたちの学び合いをさらに一段高みにあげる役目を目指す。

それぞれの項目については、校内研修で取組を進め、一人ひとりの児童を大切にしながらチーム一丸となって取組んでいるところである。

## 6. まとめ

教師が授業を変えることは並大抵のことではない。しかし、本物の教育というものは、教師の力で子どもを変えるということではなく、子どもが持っている自分を成長させ、自分を変化させる力を信じて、主体的に学び合う場所（授業）を用意することだと考える。

そして、友達と協働し、学び合ったことを、自分の成長や生き方、地域社会に生かすことでさらに一人ひとりが本物になっていくのだ。

〈PTA 新聞へのある役員さんの投稿から〉

五月に行われた運動会では、子どもたちが主体的に動き、一生懸命に演技をしている姿に、心から「志筑小学校に子どもたちを通わすことができ、本当によかったな。」と本部席から見させていただきました。

本物はつづく。続けるから本物になる。

通わすことができよかったですとだけいただける幸せを職員全員でかみしめながら、さらにこれからも、「日本一人を大切に作る学校」の挑戦は続く。

〈Qおたずねや I感想・A答え〉

Q 今までで見ているちようと違う所は何ですか。

A 「ストローのようなものがあるかないか分からない所です。」

Q 私は目玉模様なので気持ち悪いかなあと思いましたが、不思議な模様のちょうを見てどう思いましたか。

A きれいだなあと思いました。

I 目玉模様のちょうは、天敵から身を守っているのだと思います。後でぼくと一緒に、図書室でくわしく調べましょう。



分事として自然と体が前のめりになって聞き合う集団。

天敵の話題を出し、一緒に図書室で調べ

ようと話す0君。きっとこの後、二人で調べたことが次のスピーチにつながることでしょう。

こういう知的な好奇心に満ちた、子どもたちの主体的な学び合いを授業の中で積み重ねていく授業こそが、子どもの大きな変容につながるものと確信している。

また、隣のクラスをのぞいてみると、教室中に暖かい空気が流れ、自然な笑顔があふれていた。自分のことを語り、聞き合うこと自体が、温かい学級集団を創り上げることに大きくつながったのだと感じた。

また、5年生のクラスでは、小数点のある割算の筆算の問題を、児童が前に出て黒板に書きながら説明する場面だった。

筆算を書きながら、「まず、割る数の小数点を二つ動かします。次に・・・」と、クラスの友達に背中を向けて書きながら説明する児童。それを、食い入るように見つ

